

令和6年度 斎藤清美術館 館長講座・学芸員講座

【館長講座】

■ 第1回 「バッカスの信者たち」

7月20日(土) 14:00-15:30

地中海世界にワインをもたらしたバッカス(ギリシアではディオニューソス)とその熱狂的な信者たち(バッカントあるいはマイナス)が、「理性」のタガをはずして織りなした刺激的なエピソードは、古来芸術家たちの想像力を刺激し、印象的な絵画が数多くつくられてきた。

この講座では、数奇な出生に始まるバッカスの数々のエピソードを主題とした、ティツィアーノやベラスケス、ヨルダーンズ、モローなどによる名作を取り上げて紹介する

■ 第2回 「2人のヘビ頭の女—エリスとメドゥーサ」

9月28日(土) 14:00-15:30

ギリシア神話に登場する2人のヘビ頭の女のひとりである不和の女神エリスは、トロイア戦争のきっかけをつくった。見るものすべてを石と化す恐ろしい力を持つもうひとりのヘビ頭のメドゥーサは、英雄ペルセウスに殺されて首を持ち帰られたが、その首はペルセウスを2度にわたって救った。メドゥーサの首は、「護符」の役割を担っていた。本講では、ギリシア時代から近代まで、この2人の女を画家たちがどう描いたのか、物語も交えて概説する。

■ 第3回 「ドラゴンと悪魔と魔女」

11月16日(土) 14:00-15:30

東洋の「龍」を英語に訳せば「ドラゴン Dragon」となるが、実際には龍とドラゴンは似て非なるものである。ラファエロが描いたようにドラゴンは、キリスト教では神に背いて天上世界を追われた墮天使＝魔王ルキフェルと同一視されることもある。

魔王に従う「悪魔」にはキリスト教以前からさまざまな伝承があり、文学や美術において多様な形態に表されてきた。悪魔に従い悪魔を召喚するもの、あるいは反キリスト的な魔法を行うものが「魔女」である。この講座では、ラファエロからゴヤ、レノルズ、フューズリにいたる画家たちの作品を通して、この主題について概説する。

【学芸員講座】

■ 第1回 斎藤清の人体表現

6月8日(土) 14:00-15:30

斎藤清というと風景画家という印象が強いかもかもしれませんが、実は人物像も数多く制作しています。1950年代の埴輪や古仏をモチーフにした作品から垣間見える、人のかたちとしての造形性に対する関心。アトリエに入れなくなるほどのスランプに陥った時期にひたすら向き合っていたヌードクロッキー。「瞑想」「秋」といったタイトルがつけられた象徴的な女性像の数々。各時代の名品・優品を紹介しながら、斎藤清の人体表現の特徴や魅力に迫ります。

■ 第2回 《会津の冬》考 ―斎藤清にとって、「会津の冬」とは、何だったのか

8月11日(日) 14:00-15:30 ※この回のみ、日曜日の開催となります。ご注意ください。

斎藤清の代表作であり、最も多くの人々に愛されている《会津の冬》。会津坂下町生まれの斎藤が会津の雪景色を描くのは至極当然のように思われますが、実は生涯の大部分を過ごしたのは北海道・東京・鎌倉であり、斎藤自身「自分はエトランゼ(異邦人)」と述懐しています。「会津の冬を描くようになったのは、絵画性によるもので、郷愁ではない」とも。そんな斎藤が、なぜ毎年のように東京や鎌倉から会津に通っては雪景色を描き続けたのか、なぜ「会津」の「雪」でなくてはならなかったのか。「会津の冬」が斎藤清にとって、どのようなテーマだったのかを考えます。

■ 第3回 斎藤清と写真

10月12日(土) 14:00-15:30

当館は斎藤清にまつわる写真を数多く保管しています。例えばアメリカやメキシコなど斎藤が訪れた先々で撮影した写真、あるいは斎藤の肖像写真や創作の様子を収めた記録写真。これらは斎藤清研究における重要な資料です。さらに、1959年渡仏した際に通訳兼案内を務めたフォトジャーナリスト・高田美や、斎藤が深い信頼を寄せた森角勝など、同時代の写真家たちとの交流は、斎藤の画業に様々な影響を及ぼしました。そうした「写真」と斎藤清のエピソードを紹介します。